様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３７６

研究課題名（和文）越境とリミックスの世界文学：東欧ユダヤ人作家ロマン・ガリを手掛かりに

研究課題名（英文）World Literature as Trans-boundery and Remix : with special reference to Jewish writer Roamin GARY

研究代表者
高頭　麻子（TAKATO, Mako）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：６０２８７７９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　M・ダリュセック『警察調書～剽窃と世界文学』（藤原書店）を訳出し、古今の剽窃の告発例を通して文学の本質を考察し、国・言語・宗教の越境により他者性を生きることを強いられたユダヤ人（ツェラン、キッシュ、マンデリシュタームら）の例を見て「詩人はすべてユダヤ人」というテーゼ（ツヴェターエワ）を得た。このテーゼをめぐり、沼野恭子（ロシア文学）・真島一郎（アフリカ地誌学）・大辻都（カリブ文学）・温又柔（台湾籍の日本語作家）各氏とシンポジウムで議論した。
　東欧出身のユダヤ人で仏語・英語作家ロマン・ガリについて、縁の地（ヴィリニュス・ワルシャワ・ニース等）の現地調査を行い、評伝と作品の翻訳を刊行予定である。

研究成果の概要（英文）：The research started from the publication of the translation of M.Darrieussecq's Police Protocol:Plagiarism and World Literature(2013). Analyzing the works of the authors denounced for plagiarism, especially the cases of Jewish writers who were forced to live as strangers indifferently to nation,language and religion, the core of the literature seems to be revealed, which is symbolically expressed by Marina Tsvetaeva,'All poets are Jewish'.
In order to make clear this thesis, we had a symposium participated by K.MUMANO (Russian Literature),I.MAJIM(African Ethnography),M.OTUJI(Caribbean Literature) and Y.ON(Taiwanese writer).
As a typical Jewish writer of this kind, Romain GARY should be paid special attention. He was born in Russia and wrote his works both in French and English. Visiting places(Vilnius,Nice etc.) relevant to his activities to collected materials to make clear the background of his works and now I am preparing for publishing his biography and translation of his works.

研究分野：フランス文学

キーワード：世界文学　越境　リミックス　ユダヤ人　オリジナリティ　ロマン・ガリ　マリー・ダリュセック　剽窃

１．研究開始当初の背景

（1）近代の「オリジナリティ」（著作権）偏重への疑問

近代文学は、伝統や権威を破壊して「自己」の自由と個性を追求した一方で、国家主義や様々な差別により「他者」を排除してきた。しかし、あらゆるタブーが廃棄されたかに見える現在、近代的オリジナリティの追求は行き詰まり、ネットの普及がコピーを氾濫させるなか、国家・言語・性・人種の**越境**と混交が進んでいる。これまで筆者は「私有財産としての文化とは何か」（『総合社会科学研究』11 号、1999 年、総合社会科学会）や、長年の「世界の古典文学」の授業を通して、こうした問題を考察してきた。

著作権の名の下に「自己」を守るより、文学作品は既にあるものの模倣・翻訳・翻案等々（本研究では「**リミックス**」と呼ぶ）であった近代以前の文学観に立ち帰り、本研究は、リミックス概念を方法論的軸として、「**世界文学**」の新しい可能性を構想する。

（2）近代の「他者」排除への疑問→ユダヤ人と文学

近代はまた、「自己」の自由、オリジナリティを追求する一方で、国家主義や各種の差別（人種・ユダヤ人・男女・性的マイノリティ・狂気など）などにより、「他者」の排除を強化してきた。筆者は、ジェンダーやジャポニスムの研究を通して、男と女、西洋と日本の関係における「自己」と「他者」の問題を考えてきたが、本研究では、東欧出身のユダヤ人作家たちに焦点を当て、言語を越え、国境を越え、「他者」として排除される「私」のアイデンティティを、多言語・多文化の混交のなかに追求する文学の姿を、研究している。パウル・ツェラン、ミラン・クンデラなども視野に入れながら、特に、筆者が「エミール・アジャールの生と死」（『フランス文学語学研究』第 4 号、1985 年、早大大学院同誌刊行会）以来研究してきたロマン・ガリ Romain GARY を中心に研究している。

２．研究の目的

（1）「世界文学」への構想

文学とは、ケルト神話がイスラムやラテン文化を経て世界中に広まっていったアーサー王物語群のような広がりを持つものではないか、というのが本研究の根にあるイメージである。申請者は共著『フランス中世文学を学ぶ人のために』（世界思想社、2007 年）などで考察してきたが、「アーサー王」の物語は、ラテン語『ブリタニア列王伝』から古仏語韻文物語『ランスロ』や『聖杯物語』へ、また散文『トリスタン』『聖杯』物語群となり、多くの写本や続編で変形され、各国語に翻訳されて北欧「サーガ」となり、幾世紀を経てワーグナーのオペラや、数々の演劇、映画、絵画やマンガにもなった。それらはどれも、『アーサー王物語』であり、別々の作品でもある。

あらゆる作品が既にあるものの書き直しであり、あらゆる作家・読者の中にさまざまな言葉と文化が混在している**リミックス**の世界――近年再び話題になっている「**世界文学**」を、そういうものとして構想する。

（2）ユダヤ人作家ロマン・ガリ

現代文学を研究する上で、東欧出身のユダヤ人作家たちがカギとなると思われる。ロマン・ガリは、欧米では現在も広く愛されている大作家であるのに、日本では翻訳も研究も殆どない。東欧・ロシアを経てフランスに帰化したユダヤ人という出自や、複数の筆名や英仏語を使い分けた作品群など、謎も多いこの作家を研究し、日本に紹介することには意義があると信じる。現在のヴィリニュス（当時はロシア領）に生まれ、フランスの軍人・外交官として世界各地に駐留し、フランス語と英語で執筆した、ロマン・ガリの物理的・言語的「**越境**」の軌跡、各作品の分析を通して、異文化の混交にアイデンティティを求めた彼の文学の本質を考察する。

３．研究の方法

(1) マリー・ダリュセック著『警察調書：剽窃と世界文学』の訳出により、古今東西の剽窃の告発の壮大な歴史のなかに、模倣と想像力をめぐる文学の本質を見る。そこでは、自己と他者をめぐる排除の問題や、国・言語・宗教・ジャンル等の越境や翻訳の歴史も同時に見えてくる。そして、いつも越境を余儀なくされ、「他者性」を生きて来たユダヤ人作家たちの姿が浮かび上がってくる。

(2) ロマン･ガリの書いたものすべてを収集し、異なるペン･ネームのもの、英語とフランス語、ジャンルなどを区別して整理する。上述のように、世界各地で現在も愛読され、翻訳出版され、研究されている先行研究もできるだけ収集、参考にする。

(3) ガリは幼少期から世界各地を転々としているので、作品に大きな影響があると思われる地域の現地調査を行う。特に、誕生直後に勃発した第１次世界大戦などの世界史的な混乱に巻き込まれ、14 歳でフランスに入国するまでの幼少期は、自伝的作品『夜明けの約束』を読んでも、彼の生涯に決定的な影響を与える時期であるが、大国間の戦乱とユダヤ人差別のため、彼のいた頃の痕跡はどんどん失われている。ガリの越境の軌跡を追い、各滞在場所での同化と越境者としてのあり方、結婚など他者との関係を探る。滞在場所・他者との関係が、作品にどのように反映しているかを分析する。

(4) ロマン・ガリの研究を通して得たユダヤ人をはじめとし、20 世紀以降の現代文学の状況を、他の作家、他の地域の文化などと比較検討し、「世界文学」構想の第一歩とする。研究協力者たちと研究成果を発表し合って、国・言語その他の越境をめぐる翻訳・多言語使用・影響・剽窃や、「他者」との関係、滞在地でのアイデンティティなどの諸問題を考察し、より広大な文学の時空間に迫る。シンポジウムを開いて「**世界文学**」の時空間を探索し、今後に繋げていきたい。

４．研究成果

（1）ダリュセック著『警察調書：剽窃と世界文学』の訳出を完成し、2013 年 6 月、藤原書店から出版した。古今の剽窃の告発事例を出発点として、フロイト周辺で新しい学問の誕生が誰の頭の中で芽生えたものかを問う争い、ソヴィエト連邦時代のマンデリシュターム、マヤコフスキーらの粛清、ユダヤ人作家ツェランやキッシュによる多言語の引用・翻訳による創造、宗教によるサルマーン・ルシュディーの断罪、プラトンとアリストテレスの想像力論など、文学の本質に迫るさまざまな問題、特に文学と権力との関係が浮かび上がってきた。

これらの問題点の考察から、最近の日本国内での特定秘密保護法をめぐる議論や、剽窃と著作権の問題に関連して、「表現の規制・圧殺について」（『環』第 57 巻、藤原書店、2014 年）を発表した。また、2015 年には、新年にパリの風刺画新聞社へのテロ事件に際して、ダリュセックが事件当日に書いた言論の自由をめぐる文章を「シャルリ・エブド追悼（2015 年 1 月 7 日）」として、『ふらんす』（白水社）の特集号「シャルリ・エブド事件を考える」（2015 年 3 月 11 日発行）の巻頭に訳出した。

（2） Romain GARY の書誌としては、ANISSIMOV, Myriam, *Romain Gary : le caméléon*, 2004, Denoël. の巻末にある目録が、最も網羅的であると定評があるが、そこに掲載されたガリのフランス語の著作・雑誌新聞記事のほぼすべて、英語の一部を収集できた。また、それ以後、とりわけ 2014 年の生誕 100 周年を記念して出版された初期の作品や、これまで未刊行だったスピーチなど、また、スペイン語訳、ブルガリア語訳、リトアニア語訳などの本も一部、入手することができた。今後の研究に生かしたい。

（3 ）2013 年度には、①リトアニアのヴィリニュスに行き、ガリの生まれた家、第１次大

戦後にもどって数年間を過ごしたアパート、この町のユダヤ人地域と粛清の後、シナゴーグなどを訪ね、それを「ユダヤ人作家ロマン・ガリの起源を求めて：2013年リトアニア現地調査報告」(『総合社会科学』第3集6号、2014年3月）にまとめた。

2013年には、②ポーランドのワルシャワも訪ね、ユダヤ人地域や、ガリが少年期に過ごした住所を回ってみたが、ワルシャワは第2次大戦で壊滅状態になったため、ほとんどその痕跡は残っていなかった。しかし、戦後再建されたシナゴーグや、わずかに残るユダヤ人住居から、当時をしのぶことができた。

2014年度には、③ガリがフランスの外交官となって最初に赴任したブルガリアのソフィアを訪ねた。わずか1年間ではあるが、共産党独裁政権の成立期に立ち会い、赴任して親交のあった政治家が、数ヵ月後には死刑になり、外交官として優れたレポートを書き残しており、また私生活では、最初の妻レスリー・ブランチとの新婚生活、妻のマイノリティとの付き合いなど、その後の彼の創作に影響が大きい1年と思われる。フランス大使館と町の雰囲気を見たのみだが、ガリの翻訳者・研究者のZornica Kitinska（ゾルニツァ・キティンスカ）氏と情報交換できた。

同年、④ガリが最初にフランスで過ごし、母親が亡くなるまで住んでいたニースを訪ね、彼らの最初のアパートや、母がホテル経営した建物、母子が働いたことのあるホテル・ネグレスコなどを見ることができた。ここでの調査は、「ロマン・ガリのニース、あるいは嘘のなかの真実」(『総合社会科学』第3集7号、2015年3月）にまとめた。

また同年には、⑤地中海沿岸の村で、彼が最初の妻と共に過ごし、死ぬまで愛したロックブリュヌや、⑥2度目の妻や息子と過ごしたマジョルカ島も訪ね、この調査の一部を『ふらんす』(白水社）のロマン・ガリ生誕百周年特集号の、「地中海のノワイエ（溺れ人)」(『ふらんす』第89集11号、2014年11月）に書いた。

2015年度には、⑦ガリが外交官として国連のフランス代表団の一員として赴任したニューヨークと、⑧フランス公使として赴任し、2度目の妻、ジーン・セバーグと出会い、映画製作を行ったロサンゼルス、ハリウッドを訪れ、縁の地や建物を訪ねた。また⑨海を愛したガリが、代表作とも言える『夜明けの約束』を、そこで語ったという形式で書いたビッグ・サー海岸（全長約200キロ）を車で走り、彼の感性の動きを追った。このうち、⑦に関しては、当時、ガリが国連を舞台として執筆し、別のペンネームで発表した『鳩を抱く男』を和訳した（できれば出版したい)。

これらの現地調査と、自伝や他の作家による評伝で読んだことをまとめて、ガリの日本語版の評伝を執筆しており、今後、発表したい。

（4）現代文学の問題点を探る試みとして、

①2014年11月1日には、マルグリット・デュラス生誕100周年を記念して、来日したマリー・ダリュセック氏、デュラス研究者の関未玲氏と、シンポジウム「マルグリット・デュラスについてマリー・ダリュセックと語ろう」を開いた。デュラスが製作に関わった映画の鑑賞、ダリュセックによるデュラス観など、興味深い議論となった。

②2016年3月8日には、シンポジウム「越境とリミックスの世界文学」を開き、沼野恭子（ロシア文学)・真島一郎（アフリカ地誌学)・大辻都（カリブ文学)・温又柔（台湾籍の日本語作家）各氏と、『警察調書：剽窃と世界文学』(上記・摂訳）から抽出したテーゼ「すべて詩人はユダヤ人である」(ツヴェターエワ）をめぐって、極めて刺激的な議論ができた。今後、記録に残したい。

③マリー・ダリュセックがデュラスの作品の一節「Il faut beaucoup aimer les hommes（男たちをいっぱい愛さなくてはいけない)」をタイトルとし、フランス人女優がハ

リウッドで知り合ったカメルーン出身の黒人俳優・監督と恋に墜ち、彼が監督するアフリカでの映画撮影に同行する、という「越境とリミックス」の小説（2013 年）を和訳し、『待つ女』（仮題）として、近く藤原書店より刊行予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4 件）

1. 高頭麻子「ロマン・ガリのニース、あるいは嘘のなかの真実」、『総合社会科学』、査読有り、第 3 集 7 号、2015 年 3 月、pp.55-71、ISSN 0916-250X。
2. 高頭麻子「地中海のノワイエ（溺れ人）」、『ふらんす』、査読無し依頼、第 89 集 11 号、2014 年 11 月、pp.17-18。
3. 高頭麻子「表現の規制・圧殺について」、『環』、査読無し依頼、第 57 巻（2014 年 Spring）藤原書店、pp.456-459。
4. 高頭麻子「ユダヤ人作家ロマン・ガリの起源を求めて：2013 年リトアニア現地調査報告」、『総合社会科学』、査読有り、第 3 集 6 号、2014 年 3 月、pp.35-48、ISSN 0916-250X。

〔シンポジウム発表〕（計　1 件）

1. 「林忠正と日本における「美術」概念の確立・西欧化～明治の「富国強兵」政策のもとで」、国際シンポジウム「私たちはフランスの文明から何を学んだか」、富山大学人文学部フランス言語文化研究室、（発表者：田口卓臣、ジュリー・ブロック、大野＝デコンブ泰子、高頭麻子）2014 年 12 月 20 日。

〔シンポジウム企画・司会〕（計 2 件）

1. シンポジウム「越境とリミックスの世界文学」（（日本女子大学文学部、文学研究科主催、パネラー：沼野恭子、真島一郎、温又柔、大辻都、高頭麻子司会）2016 年 3 月 8 日。
2. シンポジウム「マルグリット・デュラスについてマリー・ダリュセックと語ろう」（日本女子大学文学部、文学研究科、アンスティチュ・フランセ共催、パネラー：マリー・ダリュセック、関未玲、高頭麻子司会）、2014 年 11 月 1 日。

〔図書〕（計　5 件、うち 1 件は近刊予定）

1. 翻訳と解説：高頭麻子、マリー・ダリュセック原著『待つ女』（仮題）、藤原書店、2016 年 11 月刊行予定（原著で 312 頁）。
2. 共編者および座談会出席者として随所執筆：高頭麻子、日本女子大学文学部編『漂泊・彷徨・流転』（シリーズ『饗宴』第 2 号、）、共著者：平石淑子、臼杵陽ほか、2016 年 3 月。
3. 共編者および座談会出席者として随所執筆：高頭麻子、日本女子大学文学部編『恋文』共著者：北村暁夫、平石淑子、黒子康弘ほか、（シリーズ『饗宴』第 1 号）、2015 年 3 月。
4. 共著：高頭麻子、富山大学人文学部フランス言語文化研究室編『2014 年度国際シンポジウム「私たちはフランスの文明から何を学んだか」実施報告書』、2015 年 3 月、（「林忠正と日本における「美術」概念の確立・西欧化～明治の「富国強兵」政策のもとで」、共著者ジュリー・ブロックほか、pp.35-50 執筆。
5. 翻訳と解説：高頭麻子、マリー・ダリュセック原著『警察調書～剽窃と世界文学』、藤原書店、2013 年 7 月、 490 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

高頭　麻子（TAKATO, Mako　　）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：60287795

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし